熊本大学学術リポジトリ

蕎麥の花（懸賞文四等）

著者	池田，小一郎
雑誌名	龍南會雑誌
巻	１６９
ページ	３６-５２
発行年	1919-03-31
その他の言語のタイトル	蕎麦の花（懸賞文四等）
URL	http://hdl.handle.net/2298/6449

蕎麥の花

（懸賞文四等）

一、三、乙　池田小一郎

隨分手紙をよこさないな。もう、あれから一箇月になるよ。そして僕は近く端書を書いた筈だ。すると君はあそこを越したんぢやないか。變つた事でもあるのか、如何。こつちはもう立派な秋だ。熊本といふ土地は如何したものかしら、秋の所だ、秋にふさはしい場所柄だ、と僕は思ふ。君、さうぢやないか。市中を歩いても、何處やらしんみりした、古典的といふのか、浪漫的といふのか、そんな風な空氣が漂つてゐるね。恰度此處の土層が燻つた火山灰であるのと同樣、熊本の氣分も灰色だ、濃紺色だ。そして夫れは、舊式の建物や、敦厚な人情や言語や、街路の青桐からの連想からばかりではあるまい。兎に角、熊本の秋はいゝ。僕はこの頃、たまらなくいいような氣がし出した。あの「白川の秋」といふ繪はこの產物だよ。けれども、僕が玆に言ふ秋はメランコリーな奴だ。悲痛な奴だ。不透明な奴だ。漢詩に見るような、峻嚴、明麗といふ樣な分子は反つて少い奴だ。夫れは、主觀たる僕自身の境遇が、素質が、心的傾向が、キットそれに適合するように出來てゐるんだと、君は言はう。さうだ、さうだ。ウム、矢張りさうだ。それだからこそ、此の手紙も書かうといふんだ。

オイ、三枝君。學校の櫻が咲いてるぜ。あいつ毎年咲くんだな。僕、夫れをいつも仰いで通る。はじめは狂ひ咲きと言へば面白いもんだ、植物の變態心理なんだらう、病的が好きな詩人達は喜ぶだらうと眺めてゐたね。所がさ、この頃は、是では濟まなくなつたんだ。心臟もない櫻に涙があるんだ、聲があるんだ。——

突然櫻が僕の自我に沒入し、僕が櫻の夫れに沒入した。僕は櫻となつて咲いた。そして狂つた。狂つてそして咲いた。甚だ抽象的で又、簡單ではあるが僕がかう言へば、僕の生活のすべてを理解し、同情してくれる君には、大凡の見當はついたらう。けれども、三枝君。も少し進んで具体的に言はしてくれないか。僕はほんとに苦しいんだ。反つて君の冷笑を招くかも知れない。同情を失ふかも知れない。けれども事件は僕にとつて、餘に眞劍だ。眞摯だ。可笑しかつたら笑つてくれ。僕は今、君の受取る感情をさへ考へてゐられない。君は人からの手紙を感心に保管するね。僕の是れは、無論、その厚遇を期待してゐない。一度、眼を通してもらひさへすれば、手に圓めて、ニス塗りの机でも、インキに汚れたペン皿でも拭つたつて結構だ。つまり僕は僕の心の惱みを仁慈な君の前に啓きたいんだ。若し君が眞顏に「そして、それを如何する。」と威たけだかになつたら、僕には二の句が繼げないだらうよ。僕は只管君の寬容と温情とに信頼する。けれども。作家が批評家に自己の作物を示して、彼の口から批判の語を待ちつゝある間は如何だらう。恰度、之と同樣の感情が不意に僕を不安にする。——何だか嚴かだな。

八月の十三日、といへば君が上京した十日餘り前だね。僕はその日急にF温泉行を思ひ立つたんだ。目的が湯治でなかつた事は確かである。汽車と軌道とに三時間半、俥に三時間と搖られ搖られて山上の温泉地に着いたと思つてくれ。俥夫が梶棒を下した宿が常盤屋といふのだ。僕は先づ、嬉しい嬉しいといふ心が先に立つ。僕は途中の倦怠や疲勞も忘れ、袴も取らぬなり、横になつた、——頰杖をつきながら。僕は此時、いつもの澁り切つた自己を見出す事は出來なくて、オゾン過多に犯された肺患者のようであつた。僕は子供が淡い葡萄酒にさへ醉を催した時の如く鼓動が高まつたり、目にゴム膜張られて極彩色の浮世繪を見るような

氣がしたり、寒風に曝された婦人病者の如く紅潮を覺えたり、何だか異樣にキョド〳〵してゐた。ねても居たまれず、立つて柱に倚り副つたり、座蒲團をはづして、盤坐したりした。眼は大きく見張つてゐたが床の山水の幅に感心してゐるのでもなかつた。中庭の池の珍しく太つた鯉の群に見とれてゐるのでもなかつた。僕は見ては居なかつたのだ、考へてゐたのだ。フト視線が前の二階の甍を越えた時には、眞黑く茂つた松山が目についた。その森かげにチラと輝くものがある。夫れが次第に擴がつて行く。眞白だ。眞綿のようだ。雲入道が半ば現はれる。ホンノリ色がつく。少し渦を卷くと思ふと、夫れに目鼻がつく。女のようだ。下膨れの顏、はにかんだ顏。女だ……女はまばたく。僕も反射的にまばたく。そして女は僕をジット見据ゑてゐる。夫れは、彼女だ。彼女だ。(君は「彼女」で充分わかるね。鳩子なんだ。)僕は彼女の名を呼ばうとする。彼女の目は愛に潤んで、薄明の星の如く微かに光る。「戀する心は寂しい。」と彼女の聲。僕は感激の焰に燃えた。僕は一切を忘れて突立つた。彼女の影は夢と消えた。然るにそこに又女がゐる。十指を疊に支えて「まあ!」といふ。「婢さんだね」と僕が答へる。「お食事、只今すぐいかゞ?」といふ。「未だいゝよ。」吐き出すように言ふ。それから廊下をトスリ〳〵歩いてみた。大抵の部屋は伽藍堂だ。その靜かな廊下で帳場らしい六十男と會話をかはした。やがて僕は部屋に歸つて鳩子の直ぐの弟二人を呼び寄する手紙を認めた。

F町と川をへだてて、僅かばかりの家が岩の根や山の中腹に散らばつてゐる中に、小さな別莊風の屋敷がある。夫れが、鳩子が弟妹Iに、Kに、U子にSをつれて避暑に來てる家なんだ。そこに又、彼女の祖母と叔母夫婦が住む。僕は躊躇つた。いつもの自分から見たら、馬鹿氣てゐたに違ひない、全くその理由がないんだ。是が非でも行かうと思ふ心も彼女が居る爲めだ。絶對に行くまいと思ふ心も彼女がゐる爲めだ。や

がて、IとKの二人は來た。僕は兄弟と晩飯を共にして、始終、「行かう。行かう。」とせびられた。けれども如何あつても、決心がつきかねた。（その癖、トランクの裡には、御土產など用意してゐた。）

「そんなら、まだ明るいから、そこいらを散歩しやう。」

家を出た。山の上の町には、はや秋がおとづれてゐた。僕の好きな夾竹桃は疾くに散つて、人の心を眩惑せずにはおかないと、結ひ垣の葉鷄頭のみが、黑い程赤かつた。街路は次第に谷に低くなつて行つた。家並が盡きると、水がゝりのいゝ所だけは可愛い位な稻田で、大抵は段々畑になつてゐた。午ならば、畑の隅の櫨の幹には藤色の陰が落ち、その梢に赤い葉や、半ば黃、半ば綠の葉などが映るであらう。芋の葉は碧空の光を銀に反射しつゝ横に大きく首を振つてゐるだらう。雜木林では、小枝に百舌鳥が高鳴きする榛や楢などが、秋の裝ひをしてゐるだらう。中に混じつた桐の濶葉に日の光をさしうけて、透いた所は黃金のやうに美しからう。溢れた光は、蛇の如くのたくつた樹根や、瘤だらけの幹や、なだらかな苔の上に、大小の銀貨の形して、長閑かに戲れあつてゐるだらう。けれども今は、皆が夜の帳の中に安息してゐるばかりである。二人は元氣に、振り返り勝ちに、自分に話しかけた。

「僕なんか毎日面白いよ。今日も傳吉と釣りに行つたら、兄さんのに大きな鰻がかゝつたよ。ねゝ兄さん。」

小供は相手に解らぬ固有名詞など、おかまいなしに用ゐる。

「傳吉とは誰だい。」

「あの、別莊の男よ。背の高い……」

弟のKがせつかちに言ふ。

「そして何故兄さんは早く來なかつたの。蚊も居やせんよ。温泉もあるよ。」
「何故つて。Kちやん達こそ、此處に來てるなら來てるつて事、端書でもよこせばいゝのに。わかるもんか。」
實は僕は、彼等の父から彼等の温泉行は聞いてゐた。
「僕なんか歸るの。」
「何時？」
「あした。……あした歸るの。」
「僕が來たのに。それでも歸る？」
「でも、兄さん、明後日が兒童召集日だもの。……つまらないや。」
兒童召集日など、あどけない口から聞いた僕は、思はず微笑せずには居られなかつた。弟Kの方が稍々論理的だ。
「高等學校に兒童召集日無い？」
「ハハヽヽ。そんなもの、ありやせんよ。」
と、Iが兄らしく言ふ。三人は手すりの低い、高い土橋を渡つた。道に山が迫つて、三人がくつついて通れば側の二人の着物の裾は、野萩の花を振り落したり、熊笹や葛の葉にサワ〳〵音を立てたりした。そして所々、清水が道を過つてゐた。別莊の家はやがて見ゑた。屋根は瓦の代りに萱を結つてある。(高地だから、寒に瓦が弱いんだそうな)門まで來ると二人は僕を置き去りにして内に飛び込んだ。門際に浴衣がけの人が

居る。と見れば、黄の葉雛頭だ。憎らしい程、肥つてゐる。何時の間にか、あたりの山も谷も家も森も紫から紺に變つてゐる。氣がつくと急に冷ゐる樣だ。僕は薄いシャツの上の單衣銘仙の襟をつくらつた。豊かな水は、壘々たる火成岩を洗つて、折からの夕霧の中に白い白い泡ばかりを殘して過ぎて行く。その涓々鏘々の響は自然の律呂を成してゐる。虫の聲々は庭にも叢にも充ち滿ちてゐる。けれども自分はこの沈靜な自然の中に安定の自己を掴むことは出來なかつた。當時は全く無意識だつたんだが、今から考へると僕は障子に寫る影法師は、一として見逃すまいと勉めてゐた。そしてどうやら鳩子を待つてゐた。所が大きな下女の影やチョコ〳〵走る小兎の樣な小供の影はあつても、彼女の影らしい影は絶ゐてなかつた。如何したのかと考へてゐると、不意に玄關に鋭い叫びが起る。

「兄さあん。」「にいさあん。」

「これHさん、お這入んなさいよ。まあそんな所に。」

おばあさんが出てゐる。僕の脇下に汗が出た——「何て優柔不斷な男だらう。何てわからず屋の甚六だらう。」と卑下されたに違ひないと推察して。一層、ひき返へさうかなど考へてゐる中、Iが出て玄關まで導いた時には嬉しくもあつたが、迷惑でもあつた。U子は僕の袂にすがりながら、

「いつ來たの。いつ來たの。こんなに遲く來たの。」

と、姉に似た然し小さな顏を仰いでかう言つた。漸く受け答へる此の時の自分は愛想もこそもない素振であつたらう。然し、珍らしい場所に珍らしい時邂逅して、子供達は充分滿足してゐるらしかつた。

呼子鳥を聞くといふ住ひの茶の間は衝立一重で玄關の間と別たれてゐた。

「思ひがけなくもねゐ。そしてよく來られました事。」

と、叔母が出た瞬間、衝立の向ふに隱れてゐたらしい絞り模樣の帶が身をかはした。僕の心は躍つた、見覺の、あの襟首だもの。自分は座敷に通されて、叔父夫婦に挨拶の辭を述べた。それから、會話には、いつも低音の僕が、この時には尙更低かつた。そして旋風器の風を向けられても、紅茶を進められても始終オヅ〳〵してゐた。目醒める樣な毛氈の上に据ゑられたモルモットの子の如くに。

茶の間からいさかつてる低い聲が漏れて來る。

「いゝからさ。是を持つておいでよ。」といふのは確かに叔母の聲。相手は鳩子らしい。

「何が恥かしいの、今になつて。」と、おばあさんの聲までする。

「叔父さんに？、ホホ、、、。おかしな人ねゐ。」

すると、やがて小さな足音がして、

「是は叔母さんと姉ちやんとでこさへたの。」とU子が菓子鉢をかゝゑて來た。

是から僕は、皆が注意を自分の身邊に集中してゐる氣がしてならなかつた。そして殊に、誰かが——はつきり鳩子がとは思はれない——僕のしどろもどろな談話を、絶ゑず貪り聽いてるような氣がして仕方がなかつた。だから僕は心を茶の間と御座敷の兩方に分ちながら、無意識に「さうでせうね。」といふ所を「さうなんでせうね。」といふ風に隨分他所行語を使つた。實に馬鹿な虛榮を張つたものだ。又キチンと正座してゐた。主人が「よし給へ。」と幾度すゝめてくれたか知らないけど、痛い足を辛抱してゐた。それも全く鳩子に對するみゐの爲めだ。その時、平常嫌ひな、烟草でも出されたなら、みゐの爲めには甘んじて、苦い顏もせずに

くはねたかも知れない。然し主人は至つて氣安い人だから、僕も肉身の叔父の樣な氣になつて、先刻とは全く變つた調子でしやべつた。又叔父は「僕あ、三田ですからな、赤門閥の、うちの會社は間もなく僕の首をチョン切るでせう。いゝ御隱居が出來ますさね。そしたら、いつもこんな風に遊びますわ。」話のまごとにこんな事言つて、赤ちやん抱いた叔母と僕とを心から笑はせた。僕の側にチョンボリとおひざしてゐたSは、不意に僕の後から飛びついたり、「負つて頂戴。」など甘たれたりした。さうかと思ふと、ドン〳〵と茶の間に馳けつて鳩子の手をひつぱつて居るらしかつた。

「姉ちやん、行かう。……あつち行かうよ。」

など大きな聲がした。座敷と茶の間との見渡しのつく所に坐つてる叔母は優しく笑ひながら、

「小供つてばほんとうに無邪氣でねゝ。」

と一人ごちて團扇を口にあてがつた。こんな瑣細な事柄は、自分の心臓には大浪となり、うねりにうねつて打ち寄せた。それから僕は、

「是非、此家に移つていらつしやい。旅館などに居てなるものですか。妾、お家のお母樣にお叱り受けまやわ。」など言ふ親切な夫婦の好意を謝して「又、お伺ひ致しませう。」と立つた。Iは、「明日皆と一緒に家に歸らないから。」と言ひ出した。僕は宿に一人で寂しいから、僕の所にIを置く事にした。庭に立つと、夜霧は僕等をゾッとさせた。

「もう隨分更けたからねゝ、ぢきに床に就くんですよ。」

と云ふおばあさんを最後に、皆は下駄を脱ぎ棄てゝ物陰に消ゐてしまつた。Iはねむさうに、提灯のおばつ

かない蠟燭の火を見遣りながら、「お、寒」と小さな肩をすぼめた。僕は直射する日光を浴びた猫の様に夢のやうな目附きをして、帶形の水の流れを見るともなしに見てゐた。成程僕はこの時、外見だけは極めて平靜であつた。けれども外見が平靜であればある程、心は攪亂した。そして今晩の事を思つては、何だかもどかしく、何だかじれつたくてならなかつた。殊に鳩子の仕打は、吐きたくてたまらないような大きな不滿の塊を作つた。ふと、後にホト〳〵と空氣草履が接近する。その足取りから鳩子だとすぐ解る。僕は捧立ちになつた。明い硝子戸を後にした彼女の姿は眞黑だ。上体の輪廓は可成り判然してゐるが、腰以下は濃紫の闇の中に沒してゐる。餘り多くの言ひたい言葉を持つた彼女は、何と言ふべきかと當惑する。

「お寒くなくつて。」

人なつつこい程美しい響。僕の胸はワク〳〵した。一切が煙に見えた。

「いゝわ、大してさうもないよ。」

辛くも言ひ終つた僕の舌の根は硬直した。暫くの間二人は亂調子に呼吸した。そして呼吸する空氣は水銀のように重かつた。

「姉ちやんさよなら。」と俄かにIは言つた。この一語に、二人は救はれた思ひをした。けれども淋しかつた。

「ではさよなら。」と僕は機械のように動き出す。

「さよなら。」と彼女は答へる。

兩袖が顏の方に動く。背を圓くして袖で口を被つてるのが想像がつく。二人は歩く。Iは「小便するよ」と

いふ。僕は、この時、無意識に振り返つた。まだ鳩子は立つてゐる。そして、明るみから暗がりを、透かして見るのに骨折つてゐる。突然、も一つの影が涌く。脊が高い。肩が張つてゐる。頭が圓い。俄かに僕の五体は硬化した。ブル〳〵震ひながら（自分ながらその理由がわからない）男だ、男だ、いまいましいと僕が考へる暇なく、鳩子は倒れかゝる如くに、最も手近な台所の扉を押し開いた。光はパッと戸外に流れ出る。リンリン〳〵とけたゝましい鈴の音。瞬間、僕の感動の大鐵鎚はドシンと二十四本の肋骨を打碎く。腦味噌はグラ〳〵煮ゑ返る。寒天狀に凝固した赤と紫との血潮が唸りを立てゝ有ゆる血管を打破る。天地が鳴動する。六合が眞赤になり眞黑になる。顳顬歪めと齒を嚙みしだく。膝關節は熱病患者の如くガックリ音がする。兩手は夢病者の如くあたりかもはずかきむしる。けれどもけれども僕は僕は、妖星の如くに、闇中に消ゑ去るこの不埒漢に對して何をば報復し得たか。「馬鹿野郎！」と飛び出すには、僕は餘りに多くの自尊心と高尙な教養とを持つてゐる。機を逸せず鐵拳を振りまはすには僕は餘りに遲鈍に出來てゐる。くそ遠慮、くそ沈著である。

「あゝくやしい！くやしいぞ僕は！」

自分はそれから如何んな風で宿に歸つたか、到底想ひ起す事が出來ない。唯、道すがら怨敵の名さへ知らうともしなかつたといふ事だけは言へる。實際そんな餘裕が無かつたんだ。僕にはその時實に、怒り——憤懣、激怒、憤恚、立腹。何といふ語もこの時の感情の表現には甚だ貧弱に過ぎてゐる——あるのみだつたんだ。僕は微かに知る。僕とIとの二人が、絹物ではあるが不愉快にも金巾のカバーをした蒲團にくるまつたのは十二時を三十分も越してゐた。僕は大人しく眠りに就く段か。直ちにゴッとはね起きた。Iは側に長閑

に目をつぶつてゐたが病的に濶く見開いた。その瞳ははじめ驚愕し、次に不安に轉じた。彼はとう〳〵涙聲を振るはした。

「兄さん嫌よ。そんなおつかない顔して兄さん。」

僕は病犬の鋭い聲をはり上げて之を窘めた。

「何だと！　ネツ寝てゐろ！」

彼は涙さへ浮べて夜具をしつかり顔に押し當てた、惡魔の怪火でも見たように。それから夜具の中に久しくIの啜り泣きが續いた。平常の僕でない憐れな僕は之に對して慈愛の瞥見をも與へようとしなかつた。僕は尙先に縛れた憤怒の繩が決して決して解けなかつた。IやKをよく、川や温泉に連れて行つた傳吉、鳩子のゆあみに湯殿を覗いて無駄口をたゝいた傳吉、この傳吉を聞き知つてゐる僕は直覺的にわが怨敵はその傳吉だとし、又是と斷定した。そして次の瞬間の僕は「傳吉の奴……畜生」と臨死の病人の如く息を喘いで居た。そして自分自身の激情に魔れて澁り聲で何だか非常につぶやいてゐた。

「……コラ傳吉。野郎。貴樣はおれの前にはペコ〳〵頭を下げやがつたな。今迄、猫を被つてゐやがつたな。一体貴樣は鳩子を如何しようといふんだ。不廉恥者め！、鳩子の肌を貴樣などに委かせてたまるかいおれは、な、鳩子にはハンドキッスさへ與へないのだぞ。又與へ得ないのだ。そんなに彼女は神聖に、純潔なんだ。そして鳩子はおれの一部だ。おれは鳩子の一部だ。否、彼女はおれだ。彼女はおれの生命だ。その生命を奪はうとした貴樣、おれの破滅を陰謀した貴樣、そりや必然立派な未遂の殺人犯者だぞ。而かも貴樣は家の掃除番の倅ぢやないか。それに主人に向つてあの反逆は何だ。ウン？……コラ傳吉

。貴樣はあの正直一途の親爺の忰だと思つてゐるのか。もう貴樣は叔父の家に居る事は一切許さぬ。おれがさう叔父に言ひつけてやる。いや、もふ地球の上に一刻も居てはならないのだ。死ね。死ねよ。さうだ、サッサと死んぢまへ。死が最も輕くお前に價する。弔ひにおれが是をやる。夫れは、血の池地獄の道しるべだ。さあ行け。死に行け。おれが靑鬼になつて永久に貴樣をさいなんでやるから。」

すると心の片隅で「一寸待てよ。」といふ聲が起る。

「Hよ、お前わからぬ事言ふな。神の子は自由なんだ、神の子を奴隷視してはならぬぞ。そして又、傳吉に何が惡いんだ。お前が「死ねよ。」といふに相當する犯罪があるだらうか。一概に怒るな。怒らずに考へて見よ。お前も靑年なら、彼だつて靑年だ。お前に戀があるなら、あれにもあるよ。又、同い年の二十二といふぢやないか。神の眼からは、神の子にとつて戀は平等の權利なんだ。尤もお前が彼女と婚約した事を非難するんぢやないよ。だが今のお前は淺はかな人間根性だ。何しろお前は阿呆だ。もしもお前がそんなに怒つて、眠りも得ない程に激昂する位なら、何故あの時堂々と腕づくでやつつけないんだ。お前の柔道は何の用をなす爲めだ。けれどもHよ、お前はあの影法師は確かに傳吉だと突きとめたのか。それ見ろ、それすらお前の邪推に過ぎないぢやないか。エヽ馬鹿らしい。後の祭りに、醉狂しやがつて。男らしくもない。」

此處は橋の際の、あの美しい森の中である。鳩子は僕の胸に抱かれてゐる。聖者の身邊にはおのづから、神香を發し、靈光を生ずるといふ。二人は、星月夜の下に立つてゐた筈の二人は、いつしか光の海に漂うてゐる。その光りは、聖者の光の貴さの代りに眞があり、威德の代りに可憐がある。夫れは、月の光でない。

燈の光でない。憧憬の光、愛の光である。耽溺の光である。「生の勝利」の光である。しかもクリームの如く細かで蜂密の如く柔かだ。

絲なす彼女の黑髮が、さしのべた僕の手の甲の上を流れて背に長く垂れてゐる。鳩子が身に纏ふものは桃色練り絹のガーウンだ。夫れは縫目なしの無飾である。(無飾は最上の飾りである)僕のガーウンは、卵色。僕はつく〳〵と彼女を眺めた。雪はづかしい額、薄紅さしたような耳朶、京人形のような頸すぢ、圓やかな肩の線、柔く波立つた腰のあたり、露に濡れた衣の裾。そして二人の間の咽きは絶ゆるべくもなかつた。而かもどの一語も感激の赤い酒に充されないのはなかつた。

「鳩ちやん、貴方のお父さんと僕の母とは、苦しんでゐますよね、隨分。」

「どうしてでせう。」

「どうしてつて、元々、二人は親の許した間柄だつたんでせう。それに一寸したいきさつがあつたのよ。といふのは結婚間際にをぢさん(彼女の父)が少し遊び過ごしたんでせう。堅氣な僕の外祖父さんの方では之に角を立て、をぢさんはをぢさんで、やけ氣味に、色々拗ねたんですつてさ。勿論二人が別れるなどゝは夢想だにしなかつたんでせう。所がかうしてお互にもたせ振りしてゐる中に、どうしたものか、母は僕の父に嫁つたのです。をぢさんは、義理で鳩ちやんのお母さんを迎へてしまつたのですよ。」

「ほんとうさうよ。この間、お父さんは、その爲めに、長いこと、煩悶したつて事を告白したのださうですよ。」

「誰に。」

「家の母ちやんと兄さんとこのお母様の前によ。」

僕は答へない。鳩子も語らない。重苦しい感情を抱きながら二人は二つの胸で同じ一つの事を考へてゐた。急に蘇生つたように僕が口を開く。

「でも、鳩ちやん。」

「……」

「をぢさんは鳩ちやんを生んでくれましたよ、母は私を生んでくれましたよ。」

鳩子の全身は感激に打ちふるへた。彼女がソッと顔を上げて、曇りもない瞳を僕の夫れに向けた時、僕の眼底には熱い福音の涙がわきかへつた。彼女も亦感謝の涙を催して、僕の胸に彼女の顔を埋めてしまつた——白魚のような十本の指を僕の頸の邊にあてがひながら。僕は恍惚の裡に、「さあ二人で歌はう。」といふ。鳩子は優しくうなづいて見せる。そして、身をかゞめて落葉の上のマンドリンを取り上げる。彼女は僕の爲めにとてショパンの「ノクタン」を奏でる。終りて鳩子は頰笑みつゝマンドリンを僕の兩手に抱かせる。僕は心も輕く「海邊の曲」を彈く。

彼女は歌ふ、太き細き、高き低き糸の調べにつれて。

世のわづらひをのがれいでつゝ
ひとりうみべにさまよひくれば
あゝはやわがむねはこひのおほなみ
こゝろにやすき……

一度彈く。二度繰返へす。三度となれば音も聲も天に上りて細くなり、細り果てゝ庭の筧の水音となる。ふと夢は醒める。なつかしきすべての幻影が消失せる。此處は矢張り常盤屋の一室だ。

綠色の被ひをかけた電燈の青い光の下に、Iは靜かに眠つてゐる。唇が少し弛んで、左の腕を僕の方にさしのべてゐる。誠にあどけない。僕は耐ねかねてその手をとり、自分の頰に押しあてゝ彼と彼の姉との祝福を祈つた。その時僕は餘程沈靜に返つて居たが、ぢきには眠ることが出來なかつた。又欲しなかつた。何故ならまだ〳〵僕は、愛の意識に耽りたかつたから、も少し愛を漁りたかつたから。けれどもこの精神作用は醉漢が衝動的に墮性的に、酒に酒を重ねるのとは異つて、全く自然に推移して行つた。やがて翌朝九時の景色が浮んだ。白い霧の中に黑い馬車が横はつた。KやSやU子やおばあさん達が出て來た。その中に鳩子が淑やかに裝つてゐた。傳吉が重さうな荷物を運んだ。叔母や從姉妹達が見送りに來た。Iと僕とが淋しく之を眺めてゐる。けれどもこの上に想像を擴げ、精細に入る事は出來なかつた。心身共に疲れ切つた僕は、すだく虫の音を快い子守唄としてトツプリ深い眠に陷つて行つた。

僕はもふ是以上、筆を續くる必要はない。手紙は隨分長くなつた。そして君は、何だ馬鹿々々しい。と思ふかも知れない。僕は夫れを怖れるのだ、恥ぢ入るのだ。何故なら、君は僕の最後までの同情者であり、同時に又、わが最も敬愛する精神的鞭韃者だと信ずるから。

僕は先刻散歩に出た。足に委かせて歩いてゐると遂、粟畑の中に這入り込んだ。道は名もない雜草の間を消ゑ消ゑについてゐる。僕は折から道草の中にヒヨロ〳〵長く伸びた蕎麥の花を見出した。それは、今、此の手紙を書きつゝある今、書棚の上の土器に無造作に投げ入れられてゐる蕎麥の花だ。多分今日の事件は、

君、――誠の知己である君にとつてすら、餘りに單調に、餘りにくど〳〵しく、餘りに緩漫にそして月並に過ぎてゐたかも知れぬ。然し、三枝君よ、僕には決してさうは思へないんだ。敢へて言はうものなら、最も有意義な、僕の生命の糧であり、僕の生活の飾りであると言はう。其處があの哀れな蕎麥の花と同じなんだ。といふのは、菊が香ひ、ダリアが照り、コスモスが媚びる秋の小春に、貧しく白い蕎麥の花などは、誰一人として顧る人もあるまい。同樣にこの事件以上、痛快とか悲慘とか深刻とかいふ事件は世間には無數にあるに相違ない。けれども、蕎麥は一生懸命だ。貧しいは貧しいなりに、こゝが自分の小春だと咲くんだ、だから、僕だつてこの事件は全く眞摯だ、涙がわく程だ。笑ひたくば笑つてくれ。冷かすなら冷かしてくれ。三枝君僕は怨むぞ、心から怨むぞ。何？　君は僕に忠告する？「自分で勝手な空想を畫いて、夫れに熱狂的に感激する。それは貴重な精神力の浪費だ。よせ〳〵。」など言ふんだらう。馬鹿を言ひ給へよ。空想ぢやない。事實だ現實だ。そして何が熱狂だ、何が感激だ。僕は正しい理性の中にチヤンと生きてゐる。又よくも精神力の浪費など言つたものだ。問ふ、君には人生に藝術が存在する意義がわかるか。いや、宗教でも道德でも教育でも政治でも何でもいゝ。君の筆法を以てすれば、何が精神力の浪費でないものがあるか。生命は意識の流れに過ぎないものとしたら、人生は是こそ浪費も大浪費ぢやないか。次に君は、「それなら、君の事件は偶像だ。偶像を偶像として自覺した時、現實曝露の涙にむせぶなよ。」と言ふだらう。成程、君にこそは確かに偶像だ。何となれば、譬へば、君が世界の名畫を得たとする。少くとも君が夫れを、觀賞し、理解し得ざる間は、如何な理由の下にも決して君の眞の所有だとはいはれないよ。即ち偶像だよ。今の事件が第三者たる君には偶像なのも尤もな事だ。然し僕には全く之に反する。兎に角理論はどうでもいゝよ。論理の研

究にこの手紙を書いたんぢやなし。だから、偶像なら偶像で結構だ。僕はいつまでも此の偶像を離さずに抱いてゐやう。そしてその耽溺の中に生きやう。是が僕の現在の生命だ。

僕はこゝで筆を擱いて腕を組む時、はじめて最初には殆んど豫想も出來なかつた程の昂奮狀態に陷り、飽くまでエゴイズム、排他的感情になり終つた事を認識せざるを得ない。三枝君許してくれ。僕は此手紙を決して讀みかへす氣になれないが、激した餘り——確かに激した——誠に不眞面目な、あるまじき言辭を弄した事の多いやうに記憶する。且つ又、僕は友誼ある君の前に、眞情を吐露するを得た爲めに鬱血は雨後の雲の如くあと絶ねて、今までとは異なつて特殊の、そして純化せられた血液が循環し始め、血管中の安全辨さへ甚だ彈力を增して來たやうに感ずる。それは確かに君の德の致す所だ。僕は君に對して誠意感謝する。

——(一九一八、一〇、)——

蒼白き霧の黃昏

古賀薄明

鑑の杉木立に蒼白い霧がまた夢のやうにもつれる晩秋となつた
月の光がじつとりと降りそそぐ宵は淋しいそして涙ぐましい氣分で私の心が飽和される

龍田山景象

夕されば木立の梢にほのかにも霧降る見ねて母の思ほゆ